

使用料は重量・距離のみを基準とした。同法には従事日數、車舟の牛・夫の數、或は輸送の遲速等により諸脚を高下する考え方はみられない。最も高くついたのは車運、最も安價であつたのは諸水沿流の船運であつた。また黄河派流は負般・駄運より高くついていた。唐後半に至つても運賃法は改められず、官脚は民間の私脚よりはるかに安く抑えられていた。また市價より數倍高い虚估計算の絹帛を支拂いに當て、運賃を不當に安くした例もみられる。

カイクバードの時代

井 谷 鋼 造

アラウッディーン・カイクバード一世（在位一二〇—一二三七）の時代はルーム・サルタナト（セルジュク朝）の最盛期であつたと言われている。それはこのスルターンの時代ルーム・サルタナトが對外的に積極的な軍事行動を展開し、かつそれらを支援すべき國內狀況が安定していたことによる。ルーム・サルタナトの歴史に關わる最も重要な根本史料であるイブン・ビービーの著作にはカイクバード時代の三つの主要な軍事行動として、東部アナトリアをめぐるアイユーブ朝諸王との對戰、クリミア半島の港市スグダクへの渡海遠征、ホラズムシャー、ジャラールッディーンとの對決が擧げられている。本發表ではこれらの軍事行動の具體的な狀況を明らかにすると共に、その背後にあるカイクバードの對外的な基本姿勢とルーム・サルタナトの置かれていた歴史狀況を考えてみたい。

カイクバードの軍事行動は主としてアルメニア、ジャズイーラ等の東部邊境へ向けられたが、これはかつての大セルジュク朝領土への接近を圖ることによりセルジュク家の西アジア支配の復活を企圖し、同時に東西交通に影響力を行使することを意圖したものであつた。また、小アルメニア（キリキア）及びクリミアへの遠征は地中海、黒海を介した南北貿易路の確保を目差したものであつた。このような積極的な對外姿勢の成功と領域の擴大によつて「ウルグ・カイクバード」の時代には來たるべきモンゴル軍進攻の脅威を逃れた人々が多くルームへ避難して來た。ペルシア文學史上最も有名な神秘主義詩人の一人で、ルーム・サルタナトの國都コニヤにメヴレヴィー教團を創設したジャラールッディーン・ルーミーもそうした人々のうちの一人であつた。

マムルーク朝スルターン・
アル・マリク・ル・ムアイヤド・シャイフの時代
（八二五—一二四／一四二—一二二一年）について
——ブルジー・マムルーク朝時代の

改革の一例として——

菊 池 忠 純

ブルジー・マムルーク朝第五代スルターンのムアイヤド・シャイフは、第一代スルターン・バルクークのマムルークでスルターンになつたものの一人で、アル・ム・シユラフ・パルスバニー（八二五—

四一／一四三二—三八）と並んでこの王朝の第一世代を代表するスルターンであった。シリアにおける反亂の中から勢力を伸ばしスルターン在位中には、毎年のようにシリア方面への遠征を行うとともに様々な内政改革を行った。また、ペストが蔓延して社會不安が増大した時代でもあった。

これまでの諸研究に於ても、この時代のいくつかの特徴に就いては言及されてきたが、全體としての考察は、爲されていないようである。

本報告では、カイロにおいてムフタスイブ（市場監督官）の職務を自ら行なうとともに、また、この行政職にマムルークを任命したこと、またハナフィー派やスーフィーに對する優遇など後の時代に影響を与えた施策の時代背景について考察する。また、イブン・タグリービルディーを始めとする年代記の當該時代の敘述内容を比較してその特色を述べたい。

後期オスマン朝における

イエニチェリ軍團上層部の昇進過程について

鈴木 董

中東のイスラム諸國家においては、軍隊の二元的構成が、特徴的に見い出される。すなわち、その軍隊は、君主と同民族出身の自由民からなる軍隊と、異民族出身の奴隸軍人からなる軍隊とから構成せられている場合が多い。オスマン朝においても、この二元的性は、

ムスリム・トルコ系の戰士達に淵源を有するティマル制軍隊と、キリスト教徒出身の改宗奴隸からなるカプクル軍團として見い出される。

カプクル軍團の中核をなすのは、歩兵軍團たるイエニチェリ軍團であった。イエニチェリ軍團は、オスマン史上、軍事的のみならず政治的にも極めて重要な要素であった。とりわけ、一六世紀後半以降の後期オスマン朝の政治過程においては、しばしば政治的に決定的な役割を果たした。

ここでは、この軍團の長官たるイエニチェリ・アースィを頂點とする軍團上層部の構成と昇進について、法令集成・政論書・年代記を主たる材料としつつ、検討を加え、イエニチェリ軍團上層部の性格と、イエニチェリ軍團がオスマン朝の支配組織内の昇進過程全體の中に占めた位置を明らかにするとともに、イエニチェリ軍團の政治的意義の變遷の一端にも言及することとしたい。

清初における舊明朝の王府莊田

佐藤 文俊

各地に分封され厖大な數値となった明の諸王の存立基盤は、明末農民反亂により一掃された。清朝は反清行動をとる朱氏を討滅し、「投誠」者は生存を保証すると共に、軍餉捻出の急務から明中期以降、王府・勳戚が集積した莫大な財産に注目した。王府莊田は「變價」「租田」の二方法で處理されたが、特に前者に力點をおき民田